



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Višak, T. (2022) Capacity for Welfare across Species. Oxford University Press.
Author(s)	竹下, 昌志; 篠崎, 大河; 佐々木, 健人
Citation	応用倫理, 16, 95-97
Issue Date	2025-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/ouyourin.16.95
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95764
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_9_95-97.pdf



書評

Višak, T. (2022).

Capacity for Welfare across Species. Oxford University Press.

竹下昌志（北海道大学）、篠崎大河（慶應義塾大学）、
佐々木健人

人間と人間以外の動物（以下、動物）では、達成しうる幸福の最大値は違うのだろうか。Tatjana Višak は本書を通じて、人間を含めた動物間で、達成しうる福祉の程度に根本的な違いがあるかどうかを検討している。Višak は、持ちうる福祉の量の違いを福祉能力（capacity for welfare）として考え、次の二つの立場（difference view（以下 DIF）と equality view（以下 EQU））を比較検討する。（以下、ページ数は本書のページ数を表す）

DIF：ヒト、イヌ、マウスなどの福祉主体は、認知的あるいは情動的能力の違いによって、福祉能力が根本的に異なっている。（p. 10）

EQU：福祉主体は、認知的または情動的能力が異なるにもかかわらず、福祉能力は根本的に同等である。（p. 12）

これまでの多くの議論では DIF、つまり、認知的・情動的能力の違いによって福祉能力に違いがあるという見解が支持されてきた。これに対し Višak は、EQU、つまり、認知的・情動的能力が違うにもかかわらず福祉能力は同等であるという見解が、少なくとも DIF と同程度に説得的であることを擁護している。以下、各章の概要を見る。

第 1 章では福祉の種間比較の問題が哲学で議論されていないことを指摘し（1.1 節）、本書の議論の仮定（1.2 節）と DIF と EQU の見解を要約（1.3 節）している。仮定について、本書では（1）福祉主体が誰であるかは福祉の理論に依存すること、（2）福祉をある程度定量的に測定できること、（3）異種間の福祉を単一の尺度で比較できることが仮定される。

第 2 章は 6 節からなり、各節で DIF の立場をとる理論を紹介し、それぞれを批判する。紙幅の関係で、ここでは特に影響力があると思われる Kagan（2.1 節）、Singer（2.2 節）、Budolfson & Spears（2.6 節）の理論に対する Višak の批判を見る。2.1 節では、Kagan の議論を検討する。それによると、高度な認知能力を持つものだけが得られる善が存在する。例えば、美的経験は、美的な感覚能力を持つものだけが得られる。これに対し Višak は、何が善であるかは種によって異なると主張して反論する。例えば、ヒトが美しいと感覚するものをそう感覚しない生物は、善を得られていないのではなく、その生物にとっては単にそれが善ではないのである。2.2 節では、Singer の議論を検討する。それによると、ウマとしての生と、ヒトとしての生を比べたとき、中立的な合理的存在者は、ヒトの生を好む。なぜなら、より大きな度合いの自己意識を持つ方が選好されるという点でよいからである。これに対し Višak は、ヒトがウマとしての生を想像することや、ウマでもヒトでもない中立的な観点に立つことは難しいと指摘し、Singer の直観に疑義を呈する。2.6 節では Budolfson & Spears の議論を取り上げる。かれらは、ある動物の福祉能力をその認知能力によって定めることで福祉の経験的な基準を得ようとするが、Višak は、かれらが福祉と経験的な基準の関係を明らかにしていないと批判する。

第3章ではEQUを支持する議論をしている。まず3.1節では動物福祉科学の見解を紹介し、そこでの福祉の測定が、基本的にEQUと親和的であると述べている。例えば、動物福祉の代表的な基準である「5つの自由」について、どの種に属する動物もそれらの自由に対して同じような福祉をもつとされるため、EQUと親和的であるとされる。3.2節ではHaybronの自己充足としての福祉理論を紹介し、これがEQU的に解釈できることを示している。Haybronの理論では、福祉は、(1) 幸福、(2) アイデンティティに関係したプロジェクトの成功、(3) 自己と無関係な本性の充足（健康、活力、身体的快楽）の三つから構成される。Višakは、これらの福祉の構成要素はすべて福祉主体である動物も持つものであること、また「充足」を割合で解釈することで、EQUに沿った説明として解釈できると議論する。3.3節でVišakは、EQUを擁護するための進化論的論証を提示する。そこで、Višakは「快楽性 (hedonicity)」という概念を導入する。それは、快から不快までの主観的スケールで経験を評価する福祉主体の能力である。ここで重要なのは、快楽性が伝える情報が状況に相対的であるということである。例えば、以前から多くの報酬を定期的に得ている状況で同じ量の報酬を得るより、以前から少ない報酬を定期的に得ている状況で多い報酬を得た方が快楽が強い。快楽性が相対的であることはEQUを支持する。というのも、快楽性が相対的なら、ある種が「きわめて快い」から「きわめて不快」までの快楽能力を持つのに、別のある種が「やや快い」から「やや不快」までだけの快楽能力しか持たないということはもっともらしくないからである。

第4章では寿命が異なる動物同士での福祉の比較について論じている。4.1節では、ある個体にとって短い生涯がより長い生涯よりも有害であるかどうかに関して、剥奪説、欲求不充足説、McMahanの時間相対的利害説という諸理論の観点から、前提となるメタ倫理学的主観主義／客観主義にも触れつつ考察している。4.2節では、寿命が異なる動物種同士の生涯福祉を比較する方法について、共時的福祉の合計として生涯福祉を導出する全期間説と、個体の寿命をその動物種の自然寿命と相対化する寿命相対化説の観点から考察し、前者を支持している。4.3節では、全期間説の応用として、遺伝子編集技術を用いて寿命が短くなった動物を産みだし苦痛なく殺すことが許容可能かどうか検討している。ここでは人口倫理の議論を参照しつつ、寿命を短くすることは生涯福祉を小さくすることになるため、全期間説からは短命の存在を生み出すことは悪いと議論している。

第5章ではEQUの応用について議論している。5.1節ではDIFとEQUの議論が道徳的地位の議論についてどのような含意を持つかを検討し、5.2節ではEQUに基づくと奇妙な実践的含意が出るという批判を検討している。5.3節では、ここまでの議論を考慮した上で、EQUが少なくともDIFと同程度に説得的であると結論し、私たちは動物の福祉をヒトの福祉と同等にカウントするべきだと主張している。

次に総評を述べる。まず良い点を三つあげる。

第一に、本書は短くまとまっており（全体で152ページ）、議論もわかりやすく、読み通しやすい。

第二に、本書は動物福祉論に関するサーベイ文献として有益である。例えば第2章は、動物福祉論の諸見解に関する有益なサーベイにもなっている。また、KaganやSingerといった著名な論者だけでなく、Wongのような一般には広く知られてはいない論者も取り上げられているため、動物福祉論に明るい読者にとっても有用であろう。

第三に、これまでの多くの議論では認知的・情動的能力の違いが福祉能力の違いをもたらすこと（つまりDIF）がほぼ自明視されてきたが、Višakはそのような議論を詳細に検討し、EQUを排除できるほどではないことを説得的に議論している。本書の目標は、DIFが間違いでEQUが正しいことを擁護することではなく、DIFとEQUが同程度に説得的であることを示すことである。このような穏当な目標設定によって、Višakの負う論証責任が軽くなり、DIF側に論証責任を課すことに成功しているように見える。

次に批判点を二つ述べる。第一に、EQUは意識に度合いがあるという見解と両立するか明らかではな

いということである。EQU が正しければ、福祉能力は度合いを持たない、すなわち、福祉主体の福祉能力は根本的に同等である。ここで、どの生物が福祉主体なのか、という問いが立てられうる。これに対し、Višak は意識を持つ生物（意識主体）が福祉主体であると素朴に前提しているように思われる（3.3 節）。しかし、意識の哲学においては、意識は度合いを持つと考えられている¹。これが、福祉能力に度合いを許容しない EQU とどのように両立させられうるかは明らかではない。

第二に、ある特定の福祉論からは DIF の方が説得的になりうると考えられることである。例えば、単純な選好説で、認知能力の高さによって選好の持てる最大数が違うことで、DIF を支持できるかもしれない。Višak は、選好充足と不充足のバランスによって福祉が決まるのであり、選好の内容は無関係であるという単純な選好説が EQU を支持すると考えている（p. 30）。しかし、このような立場では、持ちうる選好の最大数は重要である。もし認知能力が高いほど選好の最大数も高くなるのであれば、達成可能な福祉の程度もそれに伴って高くなることが予想される。例えば、選好を1個しか持てない貝と、100個持てる人間とで、どちらもすべての選好が満たされているなら、人間の福祉の方が貝の福祉より高くなるだろう。したがってこのような立場では DIF の方が支持されると思われる。

こうした問題点があるにせよ、福祉の異種間比較という動物倫理学における伝統的な問題を、近年の福祉論や動物の心の哲学の知見をベースに議論している点で、本書は重要な貢献をしていると考えられる。

1 Lee, A. Y. (2022). Degrees of consciousness. *Noûs*, 57(3), 553–575.